但馬国正税帳　一七二

（宮内庁書陵部写真提供）

一七三、但馬國正税帳

字面ニ「但馬國印」アリ

正倉院文書第廿九卷

（紙目裏書）
「従七位下行目坂上忌寸人麻呂」〇目坂上ノ字面ニ「但馬國印」アリ。

舊塩壹拾捌斛貳斗肆升玖合

舊酒貳拾伍斛肆斗玖升貳合　「加末多知」糟捌斛

依天平九年五月十九日恩　勅　賑給高年

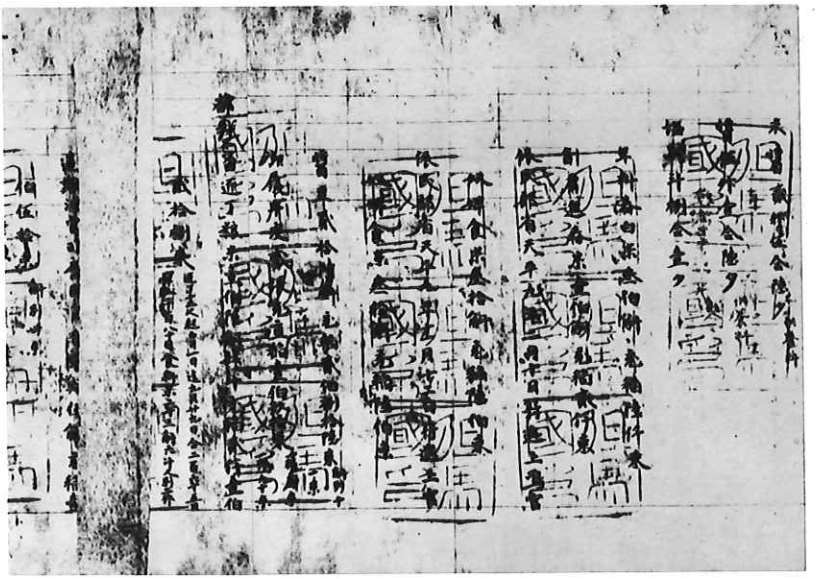
及鰥寡惸獨之徒　合壹仟貳伯壹拾

壹人　穀肆伯捌拾捌斛肆斗九十歳十人　ミ別八斗　八十歳以下一千二百　一人　ミ別四斗

雜用穎稲貳萬柒仟柒拾貳束捌把

酒壹拾斛參斗貳升陸合

「加末多知」賑給疫病者一千六百　糟捌斛人　ミ別五合



未醬貳升伍合陸夕 供養料

醬伍升壹合陸夕 供養料

塩肆斗捌合壹夕

年料舂白米參伯斛　充稲陸仟束

副庸進舂米壹伯斛　充稲貳仟束

依民部省天平九年二月十日符　進上嶋宮

奴婢食米參拾斛　充稲陸伯束

依民部省天平九年十一月十二日符　進上官

奴婢食米參拾斛　充稲陸伯束

醬豆貳拾陸斛　充稲貳伯捌拾陸束 斛別十一束

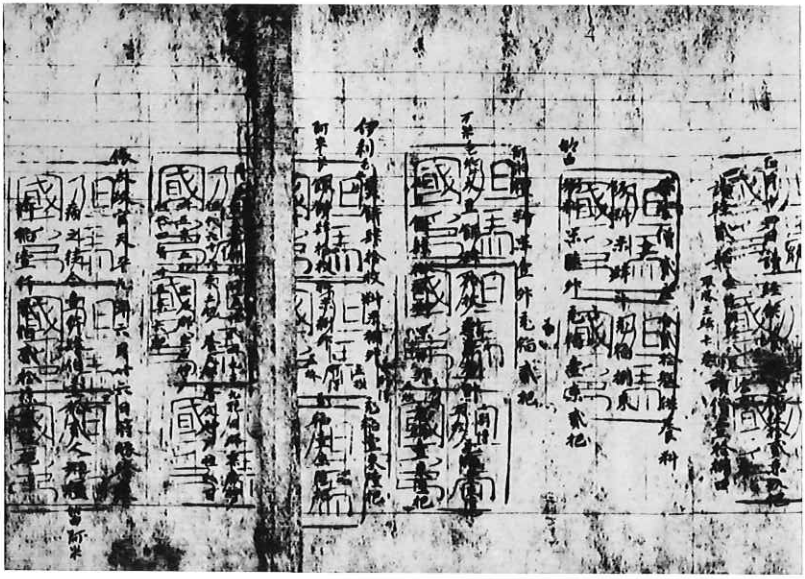
御履牛皮貳張　充直稲壹伯玖拾束 一張百束 一張九十束

「都我不」番匠丁粮米壹伯陸斛肆斗　充稲貳仟壹伯

貳拾捌束 匠丁十二人　起正月一日迄九月廿九日合二百六十五日　單三千百八十日　食料米六十三斛六斗　人別二升

造難波宮司雇民食料雜鮨伍斛　充稲壹

伯伍拾束 斛別卅束



正月十四日讀経供養料　充稲伍拾貳束玖把

讀経貳部金光明経八卷　勝王経十卷　讀僧壹拾捌口

佛聖僧貳座　合貳拾軀供養料

飯料米肆斗　充稲捌束

「加由」粥料米陸升　充稲壹束貳把

「阿米」糟料米壹升　充稲貳把

「万米毛知比」大豆餅肆拾枚　料米捌升ミ別得五枚　充稲壹束陸把

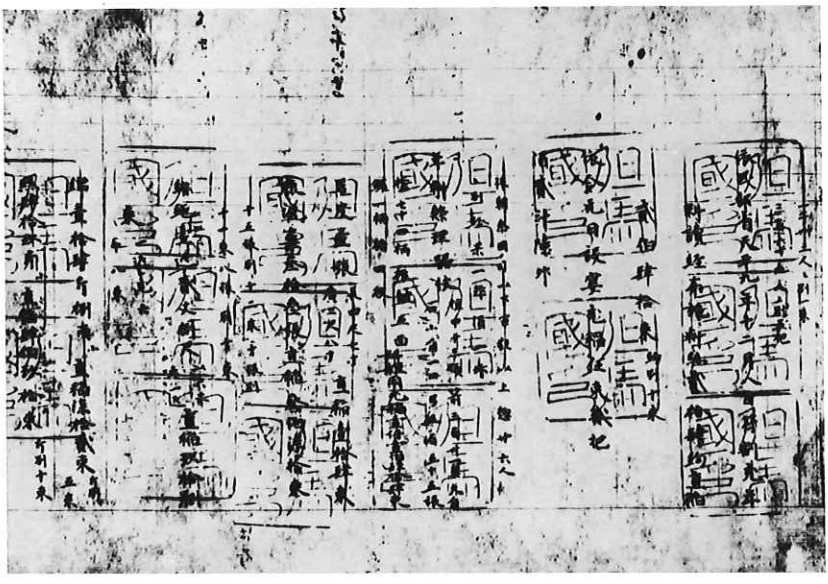
小豆餅肆拾枚　料米捌升ミ別得五枚　充稲壹束陸把

「伊利毛知比」煎餅肆拾枚　料米捌升ミ別得五枚　充稲壹束陸把

「阿米良」餙餅肆拾枚　料米捌升ミ別得五枚　充稲壹束陸把

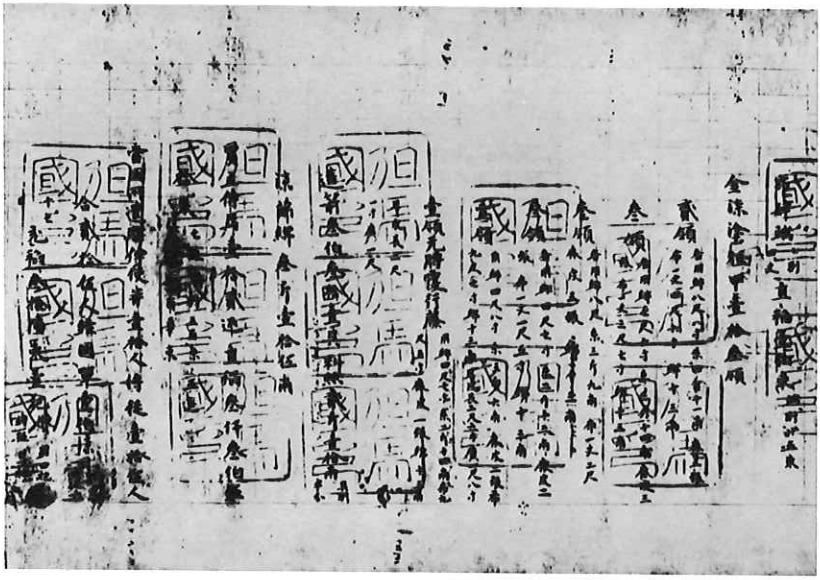
朝米郡押坂神戸租代卌九束九把　同郡粟鹿神戸租代六十六束二把　養父郡養父神戸租代百卌五束五把　出石郡出石神戸租代四百卌五束六把

依太政官天平九年六月廿六日符　賑給疫病之徒　合壹仟肆伯壹拾貳人　粥糟「加由阿米」料稲壹仟貳伯貳拾柒束伍把



一千卌三人　ヒ別一束
三百六十九人　ヒ別五把

依民部省天平九年十二月八日符　割充年
料讀経布施　料絲貳拾肆絇　直稲
貳伯肆拾束絇別十束
依令元日設宴　充稲伍束貳把
酒貳斗陸升
拜朝參國司以下軍毅以上惣廿六人
ヒ別給米一升　酒一升
年料修理器仗　桙甲十三領　箭三百卅一具　大角
一口　小角一口　弓五百五十五張
槍七十四柄　振鼓五面
鑼一柄　楯四枚　料雜用　充稲壹仟壹伯肆拾肆束
馬皮壹張　長四尺七寸　廣二尺八寸　直稲壹拾肆束
鹿洗韋參拾參張　直稲參伯柒拾束
十五張別十二束　十張別
十一束　八張別十束
緋絁壹匹貳丈捌尺　以六丈為一匹　直稲玖拾捌
束　一匹充六
十八束
綿壹拾肆斤捌兩　小　直稲柒拾貳束　斤別
五束
絲肆拾玖斤　小　直稲肆伯玖拾束　斤別十束



布肆端ミ別四丈　直稲壹伯束端別廿五束

金柒塗桓甲壹拾參領

貳領各用緋八尺八寸　糸四斤十一兩　鹿皮三張　布一丈四尺六寸　綿十三兩

參領各用緋七尺六寸　糸三斤十四兩　鹿皮三張　布一丈三尺七寸　綿十三兩

參領各用緋八尺　糸三斤九兩　布一丈二尺　鹿皮三張　綿十三兩

參領各用緋四尺七寸　糸二斤十三兩　鹿皮二張　布一丈一尺五寸　綿十三兩

壹領用緋四尺八寸　糸三斤六兩　鹿皮二張　布九尺七寸　綿十三兩　馬皮長二尺六寸廣一尺八寸

壹領无腹覆行藤用緋四尺七寸　糸二斤十四兩　布九尺五寸　鹿皮一張　綿十三兩　馬皮長二尺一寸廣一尺

造箭參伯參拾壹具　料絲貳斤壹拾兩具別半分

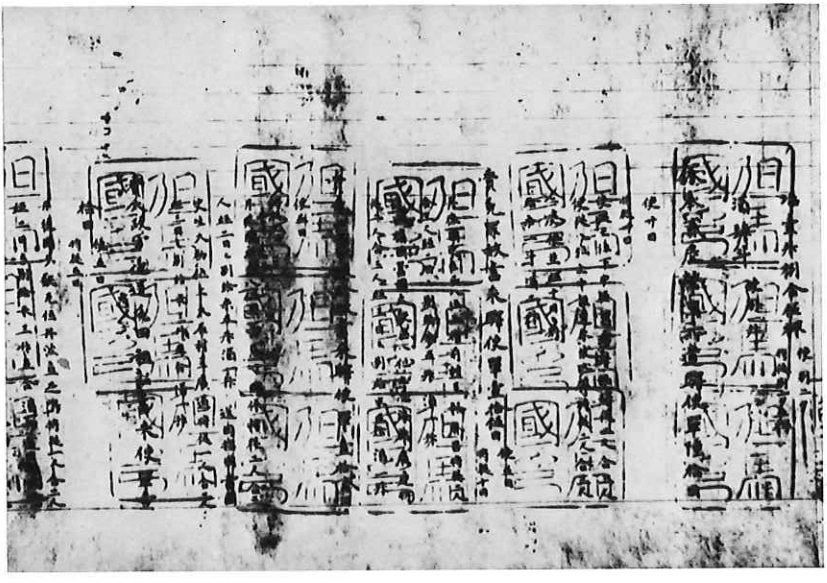
柒篩綿參斤壹拾伍兩

買立傳馬壹拾貳匹　直稲參仟參伯伍拾束七匹ミ別三百束　五匹ミ別二百五十束

當國所遣驛傳使幷壹拾人　將從壹拾伍人

合貳拾伍人　經國單壹伯柒日使卅日將從六十七日

充稲參拾陸束壹把使別四把將從三把



塩壹升捌合伍撮使別二夕 将從別一夕五撮

酒肆斗使別一升

依奉貳度幣帛所遣驛使　單陸拾日

使廿日
将從卅日

使從七位下中臣葛連于稲　将從二人　合三人
使從八位上中臣連尓伎比等　将從二人　合三人
二度使並経十日　ミ別
給米一斗　酒二升

賚免罪赦書来驛使　單壹拾伍日使五日 将從十日

丹後國史生正八位上檜前村主稲麿呂　将從二人
合三人　経二日　ミ別給米五升　酒一升
送因幡國當國大錄正八位上忍海部廣庭　将
從二人　合三人　経三日　ミ別給米五升　酒一升

賚免罪并賑給赦書来驛使　單壹拾貳日

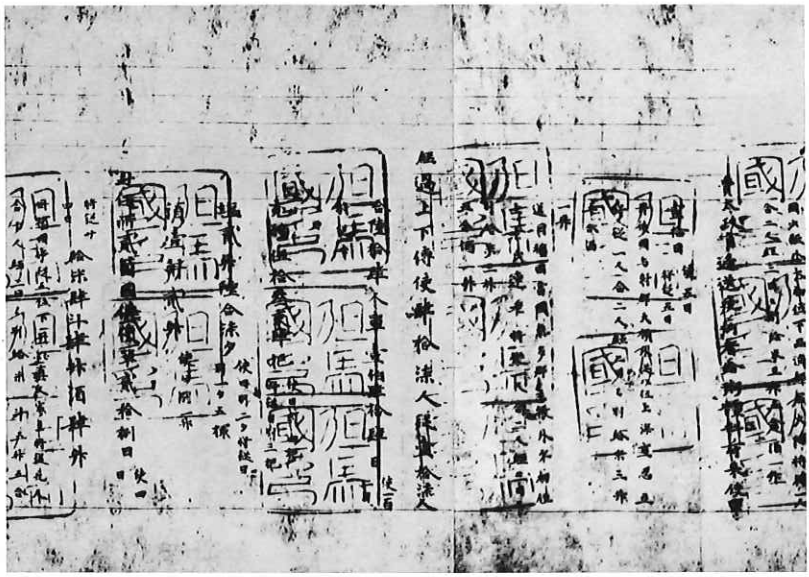
使五日
将從七日

丹後國目正八位上臺忌寸國依　将從二人　合三
人　経二日　ミ別給米五升　酒一升　送因幡國當國
史生大初位上大石村主廣道　将從一人　合二人
経三日　ミ別給米三升五合　酒一升

賚太政官遞送免田租詔書来使　單壹

拾日使五日
将從五日

丹後國少錄无位丹波直足鳴　将從一人　合二人
経二日　ミ別給米三升五合　酒一升　送因幡國當

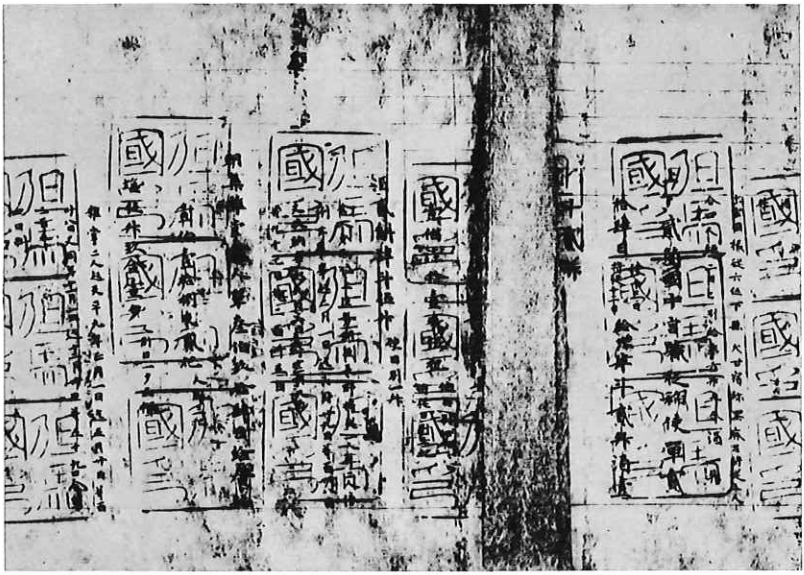


國少毅外大初位下品治部君大隅　將從一人
合二人　経三日　〻別給米三升五合　酒一升

賣太政官遞送疫病者給粥糟料符来使　單
壹拾日使五日
將從五日
丹後國与射郡大領外從八位上海直忍立
將從一人　合二人　経二日　〻別給米三升
五合　酒
一升
送因幡國當國氣多郡主帳外少初位
上桑氏連老　將從一人　合二人　経三日　〻
別給米三升
五合　酒一升

経過上下傳使肆拾柒人　從壹拾柒人
合陸拾肆人　單壹伯肆拾肆日使一百二日
將從卌
二日
充稲伍拾參束肆把使日別四把
將從日別三把
塩貳升陸合柒夕使日別二夕　將從日
別一夕五撮
酒壹斛貳升使日別一升

赴任所貳箇國傳使　單貳拾捌日使四日
將從廿
四日
給米肆斗肆升　酒肆升
因幡國守從五位下丹比眞人家主　將從九人
合十人　経二日　〻別給米一斗五升五合

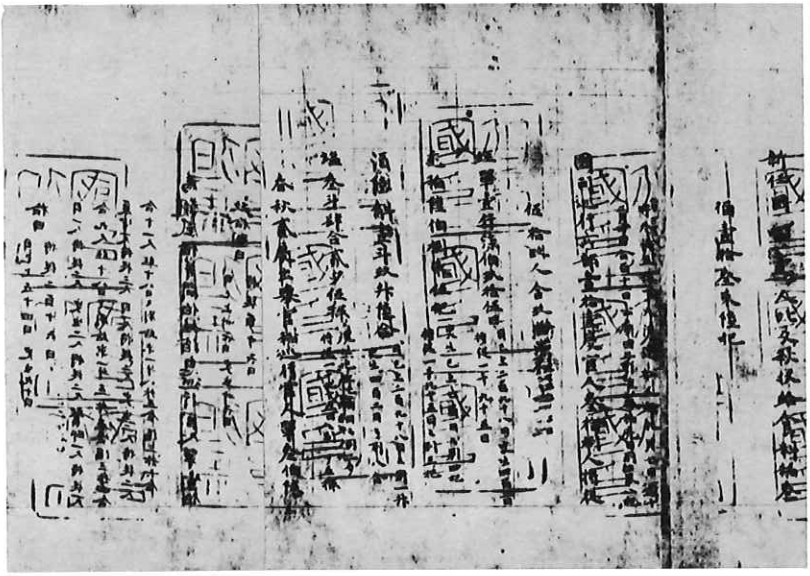


酒一
升
出雲國掾從六位下縣犬甘宿祢黒麻呂　將從三人
合四人　経二日　〻別給米六升五合　酒一升

上下貳箇國中宮職捉稲使　單貳
拾肆日使十三日　將從十二日　給米肆斗貳升酒壹
斗貳升

中宮職捉稲経國　單貳伯肆拾伍日　充稲
壹伯柒拾壹束伍把使日別四把　將從日別三把
酒貳斛肆斗伍升使日別一升
舍人少初位上巨勢朝臣長野　將從一人　并二人　依
例出擧事　起二月一日迄六日廿九日　并百卌八日
又收納事　起九月一日迄十二月九日
并九十七日　惣二百卌五日

朝集雜掌貳人　單參伯玖拾肆日　給食稲
壹伯壹拾捌束貳把人別三把
塩伍升玖合壹夕人別日一夕五撮
雜掌二人　起天平九年正月一日迄五月廿日　并百
卌八日　又同年十一月一日迄十二月卅日　并五十九日　合單
（起脱カ）
三百九十
四日料



新任國司壹人　比及秋收　給食料稲參

伯壹拾參束陸把

守外従五位下大津連船人　起九月七日迄十二月卅日　合百十二日　公廨田二町　准獲稲　充日別二束八把

國司巡行所部壹拾壹度官人　參拾捌人　將従

伍拾玖人　合玖拾柒人

経單壹仟柒伯玖拾伍日　目已上二百九十八日　史生四百二日　將従一千九十五日

充稲陸伯捌束伍把　史生已上七百日　ミ別四把　將従一千九十五日　ミ別三把

酒陸斛壹斗玖升陸合　目已上二百九十八日　ミ別一升　史生四百二日　ミ別八合

塩參斗肆合貳夕伍撮　史生已上七百日　ミ別二夕　將従一千九十五日　ミ別一夕五撮

春秋貳度出擧官稲巡行官人　單參伯陸

拾日　目已上五十四日　史生九十日　將従二百十六日

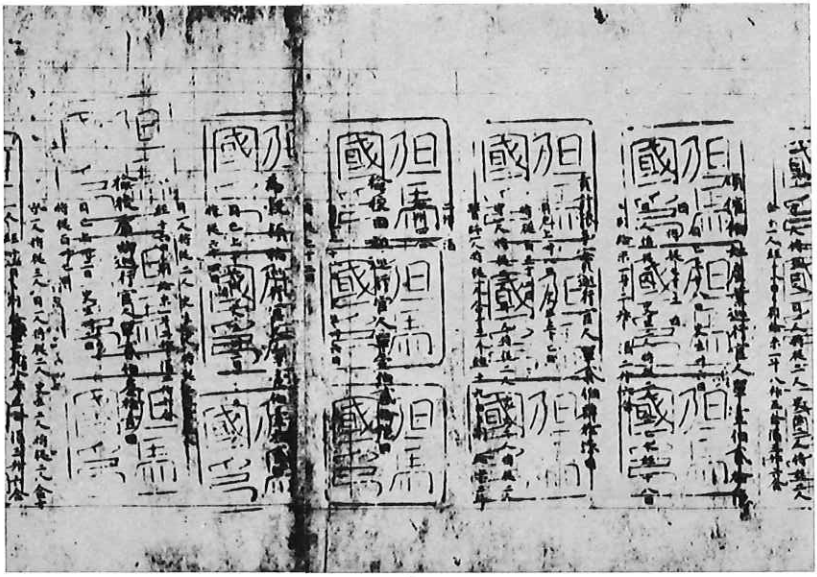
目一人　將従二人　史生二人　將従二人　醫師一人　將従一人　合九人　経十八日　ミ別給米一斗五升五合　酒三升四合

夏守一人　將従三人　目一人　將従二人　史生二人　將従二人　合十一人　経十八日　ミ別給米一斗八升五合　酒三升六合

爲觀風俗幷問伯姓消息巡行官人　單壹伯

玖拾捌日　目已上卅六日　史生卅六日　將従百廿六日

守一人　將従三人　目一人　將従二人　史生二人　將従二人　合十一人　経十八日　ミ別給米一斗八升五合　酒三升六合



領催伯姓産業巡行官人　單壹伯貳拾陸日　目已上十八日　史生卅六日　將從七十二日

目一人　將從二人　史生二人　將從二人　合七人　経十八日　〻別給米一斗二升　酒二升六合

責計帳手實巡行官人　單貳伯肆拾柒日　目已上卅八日　史生五十七日　將從百五十二日

守一人　將從三人　目一人　將從二人　史生二人　將從二人　醫師一人　將從一人　合十三人　経十九日　〻別給米二斗二升　酒四升四合

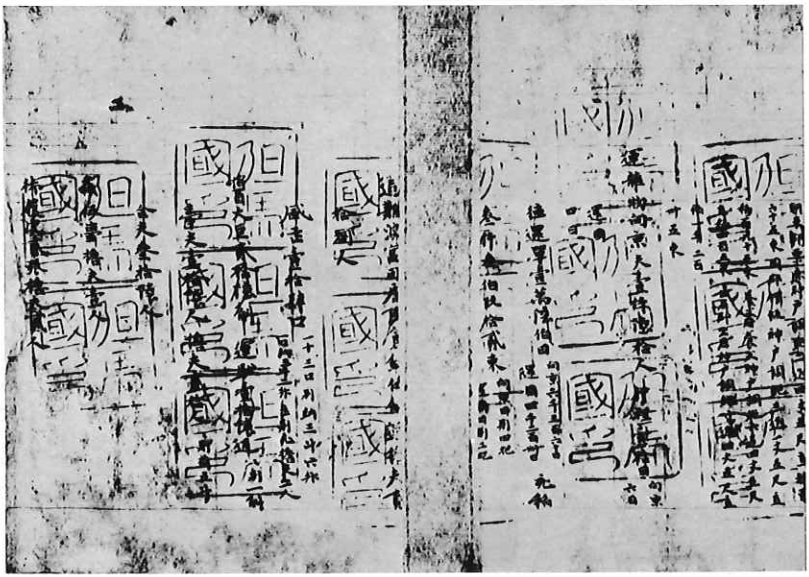
撿校田租巡行官人　單壹伯貳拾陸日　目已上十八日　史生卅六日　將從七十二日

爲穀穎稲巡行官人　單壹伯壹拾貳日　目已上十六日　史生卅二日　將從六十四日

目一人　將從二人　史生二人　將從二人　合七人　経十六日　〻別給米一斗二升　酒二升六合

撿校庸物巡行官人　單貳伯參拾壹日　目已上卅二日　史生卅二日　將從百卅七日

守一人　將從三人　目一人　將從二人　史生二人　將從二人　合十一人　経廿一日　〻別給米一斗八升五合　酒三升六合



收納當年官稲巡行官人　單壹伯捌拾玖日

目已上卌二日　史生廿一日

将從百廿六日

守一人　将從三人　目一人　将從二人　史生一人　将從一人

合九人　経廿一日　〻別給米一斗五升　酒二升八合

依例供給尼肆口　單壹仟肆伯壹拾陸日　給食

稲伍伯陸拾陸束肆把起正月一日盡十二月卌日合三百五十四　日〻別一束六把

塩貳斗捌升參合貳夕尼別日二夕　價稲貳拾捌束

參把以一束得塩一升

依例造蘇伍壺大二小三　乳牛壹拾參頭取乳廿日

單貳伯陸拾頭　秣稲壹伯肆束牛別日四把

依太政官天平九年四月廿八日遞送符　買進上奴

壹人　直稲壹仟束

依民部省天平九年十月五日遞送符　買充

神戸調絁參拾參匹參丈　直稲貳仟

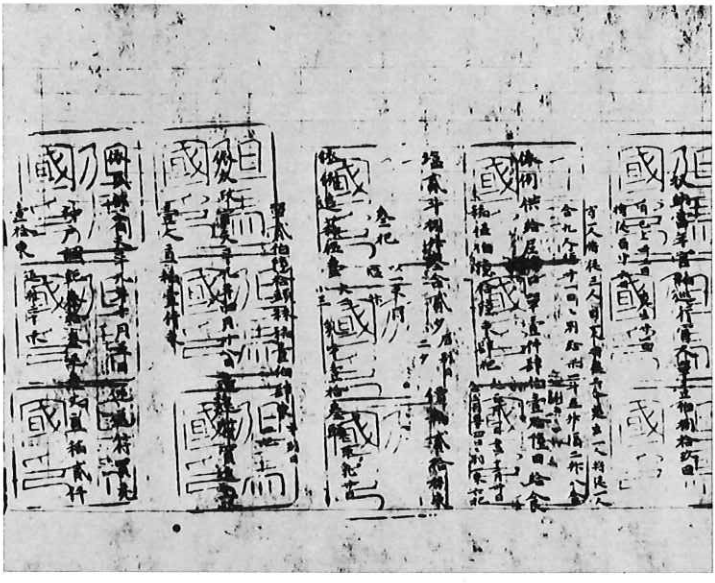
壹拾束四別六十束

朝来郡粟鹿神戸調絁二匹四丈五尺　直稲百

六十五束　同郡押坂神戸調絁三匹一丈五尺　直

稲百九十五束　養父郡養父神戸調絁廿匹四丈五尺

直稲四百五束　出石郡出石神戸調絁六匹四丈五尺　直



稲一千二百
卌五束

運雜物向京夫壹仟陸拾人　行程壹拾日向京六日
還國四日

往還單壹萬陸伯日向京六千三百六十日還國四千二百卌日　充稲
參仟參伯玖拾貳束向京日別四把還國日別二把

造難波宮司雇民食鮨伍斛　運擔夫貳
拾捌人
盛缶壹拾肆口一十三口別納三斗六升一口納三斗二升　缶別充擔夫二人
醬大豆貳拾陸斛　運駄壹拾陸匹ミ別一斛
牽夫壹拾陸人　擔夫貳拾人ミ別荷五斗
合夫參拾陸人
蘇伍壺　擔夫壹人
御履皮貳張　擔夫貳人

但馬国正税帳の解説

（一）

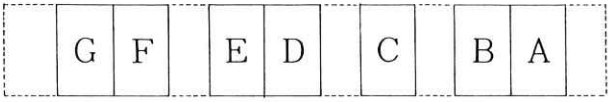
正税帳とは、律令制度下における諸国の国衙・郡衙を中心とする一年間の収支決算報告書であり、四度公文の一つである。[1] 律令制下において、各国の国司はその国の正税の一年間の収納高・現在高・支出用途を明記して、[2] その附属帳簿と一緒に正税使が毎年中央政府に進上した。[3] そしてその帳簿は民部省の主税寮が検査した。『正倉院文書』の中には、天平二～十年（七三〇～七三八）にわたる諸国の正税帳が二四通現存しており、[4] 但馬国正税帳はその内の一つである。

さて、右の如く、正税帳は国衙・郡衙を中心とする年間の収支決算書であるため、行政の実態すべてをこれから描き出すことは困難である。また正税帳が記載の対象としているのは、律令制における租庸調雑徭制の収取体系の内、「租税」のみであることにも注意することが必要である。しかも、正税帳は官文書であるため、「租税」を実際に負担している班田農民の農業生産の実態を把握することはほとんど不可能である。しかし、そのような制約をもちながらも、正税帳の史料的価値は高いといわねばならない。なぜなら、一般に律令制の最盛期といわれる天平前期の国衙行政を具体的に示す史料は、正税帳以外には存在しないからである。

（二）

現存の[5]但馬国正税帳は、『大日本古文書』巻二および『寧楽遺文』上巻に収められ活字化されている。その原本は、七枚の断簡から成っている。今それを『大日本古文書』の配列に従って、第一紙＝A、第二紙＝B、以下C～Gと呼ぶことにすると、別図の如く、AとB、DとEとは接続し、FとGとは接続の可能性が強い。一方、BとC、CとD、EとFとは、その間に若干の欠失部分がある。そして、冒頭部分と尾部とは

「但馬国正税帳」の接続



注）『兵庫県史』第1巻609頁図44を転載した。

欠失している。一般に、正税帳はその国の全体の収支合計を記した部分と、その内訳を郡別に記した郡部とからなるが、本帳の現存部分はすべて前者に属することがわかっている。

冒頭部分が欠失しているので但馬国府が保有する穀（籾）や穎（穂首）の総量、一年間の租税の収入額、出挙の状態などは不明である。また、尾部が欠けているために、本帳の作られた正確な年月は不明であるが、本帳に引用されている勅・太政官符・民部省符などがいずれも天平九年のものであるので、天平九年（七三七）度のものであることがわかる。おそらく、翌天平十年（七三八）のはじめに中央政府に進上されたものであろう。[6]

（三）

次に内容を少しみておこう。Aの部分につぎのような記載がみられる（別筆書き込みは省略）。

雑用穎稲貳萬柒(七)仟柒拾貳束捌(八)把
酒壹拾斛(石)参斗貳升陸合(六)
糟捌斛賑給疫病者一千六百人ミ別五合
未醬貳升伍合陸夕供養料
醬伍升壹合陸夕供養料
塩肆(四)斗捌合壹夕

さて、これはこれらの品目の支出合計であり、その内訳は次の如くである。まず「糟」は「加末多知」と訓んでいるが、これは酒の一種で、いわば「滓酒」のこと。「賑給疫病者」というのはCの部分に「依ニ太政官天平九年六月廿六日符一、賑ニ給疫病之徒一」云々とあるのが参考になろう。天平九年には全国的規模で大疫（天然痘）が流行したが、これはその時に庶民に支給

「但馬国正税帳」にみえる使途費目の明細（兵庫県史より）

第1表　雑用穎稲使途

断簡	使途費目	支出量
		束把
A	年料舂白米	6,000.0
A	副庸進舂米	2,000.0
A	嶋宮官奴婢食粮	600.0
A	官奴婢食米	600.0
A	醬豆料	286.0
A	御履牛皮料	190.0
A	番匠丁粮	2,128.0
B	造難波宮雇民粮	150.0
B	斎会供養料	52.9
C	神戸田租代	697.2
C	賑給疫病食料	1,227.0
C	年料読経布施糸料	240.5
C	元日設宴料	5.2
C	年料修理器仗料	1,144.0
C	買伝馬料	3,350.0
C	当国所遣駅伝使粮	36.1
C	経過上下伝使粮	53.4
D	中宮捉稲使粮	171.5
D	朝集雑掌粮	118.2
D	新任国司粮	313.6
E	国司巡行粮	608.5
F	供給尼粮	566.4
F	供給尼塩	28.3
F	乳牛秣料	104.0
F	買奴料	1,000.0
F	神戸調代	2,010.0
F	運雑物向京夫料	3,392.0
合計		27,072.8

第2表　雑用酒使途

断簡	使途費目	支出量
C	元日設宴	石2斗6升0合
C	当国所遣駅伝使	4 0 0
C	経過上下伝使	1 0 2 0
D	中宮職捉稲使	2 4 5 0
E	国司巡行	6 1 9 6
合計		10石3斗2升6合

第3表：雑用塩使途

断簡	使途費目	支出量
C	当国所遣駅伝使	斗1升8合0勺5撮
C	経過上下伝使	2 6 7 0
D	朝集雑掌	5 9 1 0
E	国司巡行	3 0 4 2 5
合計		4斗0升8合1勺0撮

第4表：年料修理器仗料内訳

費目	支出量
馬皮1張	14束
鹿洗韋33張	370
緋1匹2丈8尺	98
綿14斤8両	72
糸19斤（小）	490
布4端	100
合計	1,144

第5表：当国所遣駅伝使粮内訳

費目
依奉弐度幣帛所遣駅使
賫免罪赦書来駅使
賫免罪幷賑給赦書来駅使
賫太政官遞送免田租詔書来使
賫太政官遞送疫病者給粥糧料符来使

注　支出量は省略

されたものであろう。「〻別五合」とあるので一六〇〇人の人々が一人五合ずつもらったことになる。「糟」は一般庶民用の酒らしく、官人にはその前行の「酒」

第6表「但馬国正税帳」にみえる国司巡行日数（兵庫県史より）

断簡	使途費目	巡行日数			
		目已上	史生	将従	小計
		日	日	日	日
E	春秋弐度出挙官稲	54	90	216	360
E	為観風俗并問百姓消息	36	36	126	198
E	領催百姓産業	18	36	72	126
E	責計帳手実	38	57	152	247
E	検校田租	18	36	72	126
F	為穀穎稲	16	32	64	112
F	検校庸物	42	42	147	231
F	収納当年官稲	42	21	126	189
	（不明巡行3度）	34	52	120	206
	合計	298	402	1,095	1,795

（これは清酒）が支給されており、ここにも官人と庶民との身分的差別がみられる。次の「未醤」は味噌の類、「醤」はもろみの類らしく、ともに「供養料」に用いられている。これはB部分に「正月十四日読経供養料」とあるのに対応したものであろう。

ところで、残りの「雑用穎稲」「酒」「塩」の支出内容は本帳の各断簡に支途別にわけて記されている。それらを示せば第1～3表の如くなる。それらの支途費目のうち注意を引くものをみると、まずC部分に「年料修理器仗料」がみえる。これは但馬国の所有の武器類の補修費であり、その内訳は第4表の如くである。次に「當国所遣駅傳使料」であるが、これは但馬国が派遣した駅使に支給したいわば出張手当（第5表参照）。これについては、よく研究されており、本帳がよくひき合いに出されて論じられている。[7] また「経過上下傳使料」は但馬国を経過した伝使に要した費用。「因幡國守」や「出雲國掾」が都から任国へ赴任した記事もみられる。さてEの部分に国司が国内を巡行する内容

が示されている（第6表参照）。当時の地方政治のありさまをある程度これから知ることができる。なかでも、「春秋貳度出擧官稲」に最も多くの日数を費やしているが、これは地方政治において、いかに公出挙が重要であったかを示していよう。

補注

（1）律令制下において、地方官が行政状況を中央政府に報告する文書。大計帳・正税帳・調帳・朝集帳の四つをいう。いずれも附属帳簿（枝文）がある。

（2）律令制下で国庫に貯蔵された租税。広義には公廨（くがい・くげ）・雑稲・出挙稲の総称であるが、狭義には出挙稲のみをさす。出挙稲は、それを出挙（すいこ）に出して、その利稲を地方政治の主たる財源とする（田租は一般には使用されず、備荒貯蓄されていた）。

（3）すなわち、田租の収納額と現在高、出挙の実情およびその支出用途。

（4）一般に二五通といわれているが、その内の一通（天平二年の隠岐国正税帳）は、じつは郡稲帳である。

（5）以下の記述は、主として『兵庫県史』第一巻六〇八～六一三頁、井上辰雄『正税帳の研究』による。

（6）『延喜式』巻二三民部下に「凡進正税帳者、皆限二月卅日以前、並申送官」と規定されている。なお、天平九年の駿河国正税帳は天平十年二月十八日に、同年の和泉国正税帳は同十年四月五日に申送されている。和泉国は申送が期限よりおくれているが、これは天平九年の大疫によるものと考えられている。

（7）古くから研究されているが、最近では大山誠一「古代駅制の構造とその変遷」（『史学雑誌』八五―四）、山里純一「天平期における駅使食料費の財源について」（『国学院雑誌』七八―六）、柳雄太郎「駅伝制についての若干の考察」（井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』中巻所収）などがある。

五、花押かゞみ

（本書古文書編関係）

花押について

日本の中世の古文書は、その大半は佑筆と称する書記が代筆したものであり、発給主体である本人の筆跡はその文書の文言からは伺うことが出来ない。いわば代筆されたものであって自筆ではないわけである。もちろん私的な書状など、希には「自筆文書」もあり、その場合は珍重されることはいうまでもない。

ところで、文書の正文（原本）には必ず自署された花押というものがある。花押は、書き判とも呼ばれ、自署が転化したもので、自署をくずして行書や草書にかき、さらに他人にまねられないような独特な装飾を加えて、符号化したものである。平安時代初期からぼつぼつ現われはじめて平安末期には一般化した。公家様・武家様などさまざまな形があり、江戸時代中期の有職故実家の伊勢貞丈は、その花押分類の研究書『押字考』で花押をつぎの五類型に分類したという。

草書体――平安時代中期
二合体――平安時代末期
一字体――室町時代初期
別用体――同上
明朝体――戦国時代

花押の発達史としてはともかく、花押の分類としてはこのような作り方の方法があったことが読みとれる。花押は個人によってもいくつかの変遷をたどるし、また、同一人でも官職に応じて武家様と公家様を使い分ける場合がみられる。

さて、中世の訴訟においては、文書主義が前提とされた。そのために謀書の罪科は厳しく規定されていた（御成敗式目第十五条）。

訴訟に際して、証拠として提出された文書が謀書、即ち偽文書であるかどうかは正否を見分ける裁判の判決をゆがめることとなるから厳しく取締られたわけである。

この偽文書の判定の有力な方法の一つが花押の識別

であった。例えば、康永三年（一三四四）七月七日足利直義下知状案（「斑鳩旧記類聚」所収）に、法隆寺学侶と山本三郎入道覚誉が播磨国鵤（いかるが）荘の公文職をめぐる相論が幕府の引付方に提訴された時、覚誉が証拠として提出した文治三年（一一八七）七月日、源頼朝袖判下文をめぐって「文章云、御判云聊（いささか）依レ有二疑貽（ぎたい）一、真偽」するところとなり、七名の奉行人のうち三名が「御判謀作」の由を申している。謀書を識別する有力手がかりとして謀判かどうかが論議されているのはその一例である。

花押の持つ重みはともかく、花押というのは本人自から署判を加えたものであるから、直接、個人の個性なり、筆跡の筆の運びなどの一端にふれることが出来る数少ない痕跡の一つである。

ここに収録した花押一覧は、本町に関係した歴史上の人物を年代順に配列したものである。それぞれの人物の花押を通じて歴史のいぶきともいうべきものを感じ取ることが出来よう。

凡例

一、花押は、本書収録の古文書の原本にある人物の花押を集めて編集した。

一、花押の人名は、職名氏名等すべて文書に記載のとおりにしたが、詳細については解説を参照されたい。

一、花押は人物別に原本の年代順に配列した。

一、花押は資料にある人物の影印と依拠する文書件名とその文書の年月日を掲げたが、影写の大きさはそれぞれ本書に収めるためにしたものである。

文書年の下に西暦を（　）内に入れて参考とした。

一、各花押の文書名番号は、解説題目番号である。

一、花押はないが花押人名に関連する文書も、研究参考のために付記し文書名番号の上に「付」と印した。

一、大介高階朝臣

仁和寺文書

六二　但馬国司庁宣

建久九年（一一九八）九月

二、陸奥守平（北条義時）

仁和寺文書

①六三　関東下知状

貞応元年（一二二二）七月七日

②六四　鎌倉幕府下知状

貞応二年（一二二三）十月三日

進美寺文書

③付九　関東下知状案

建長三年（一二五一）九月十八日

三、中宮太夫

仁和寺文書

六五　四条天皇綸旨

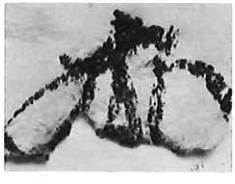
貞永元年（一二三二）十月三日

四、聖　某

進美寺文書

一六　聖某宛行状

弘安三年（一二八〇）十二月廿三日



五、右衛門尉（源宗定）

大岡寺文書

二七　源定宗田地寄進状

正応三年（一二九〇）庚寅十月

六、法眼覺乗

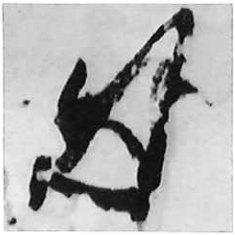
仁和寺文書

六七　法眼覺乗奉書

永仁二年（一二九四）五月八日

七、権大僧都法眼和尚代
進美寺文書
二一　延暦寺根本中堂後戸寺領補任状
正安元年（一二九九）七月

八、某
進美寺文書
二一　延暦寺根本中堂後戸寺領補任状
正安元年（一二九九）七月



九、源忠員
高山寺文書
七五　源忠員尼妙眞寄進状
正安二年（一三〇〇）二月九日

一〇、橘氏女
大岡寺文書
二八　橘氏女田地寄進状
正安二年（一三〇〇）庚子六月八日

一一、沙弥覺阿
大岡寺文書
①二八　橘氏女田地寄進状
正安二年（一三〇〇）庚子六月八日
②三〇　橘覺阿等連署田地寄進状
応長元年（一三一一）十一月八日
③付三一　橘覺阿等連署畠地寄進状案
元亨三年（一三二三）歳次癸亥五月廿日

一二、大法師實俊
大岡寺文書
二九　僧實俊佛供田施入状
徳治二年（一三〇七）歳次丁未十二月十三日

一三、橘盛眞

大岡寺文書

三〇　橘覺阿等連署田地寄進状

応長元年（一三一一）十一月八日

一四、雅楽助（橘有眞）

大岡寺文書

①三〇　橘覺阿等連署田地寄進状

応長元年（一三一一）十一月八日

②付三一　橘覺阿等連署畠地寄進状

元享三年（一三二三）十一月八日

一五、某

徳禅寺文書

六九　八代荘安養院領田寄進状

正和五年（一三一六）三月

一六、某

徳禅寺文書

七〇　八代荘安養院領田寄進状

元享元年（一三二一）十月五日

一七、公文大法師隆範

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

一八、大法師幸祐

進美寺文書

二三　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

一九、学頭大法師了覺

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二〇、大法師覺弁

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二一、大法師祐憲

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二二、大法師覺賢

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二三、大法師豪澄

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二四、大法師快慶

進美寺文書

二二　進美寺住僧等解状

元享元年（一三二一）三月

二五、大法師隆嚴
進美寺文書
二二　進美寺住僧等解状
元享元年（一三二一）三月

二六、院主権律師幸憲
進美寺文書
二二　進美寺住僧等解状
元享元年（一三二一）三月

二七、惣判官代　品治
進美寺文書
二三　但馬国判並在庁官人等連署證
判
元享元年（一三二一）三月

二八、惣判官代　紀
進美寺文書
二三　但馬国判並在庁官人等連署證
判
元享元年（一三二一）三月

二九、惣判官代　赤染
進美寺文書
二三　但馬国判並在庁官人等連署證
判
元享元年（一三二一）三月

三〇、惣判官代　平
進美寺文書
二三　但馬国判並在庁官人等連署證
判
元享元年（一三二一）三月

三一、惣判官代　三宅

進美寺文書

二三　但馬国判並在庁官人等連署證

判

元享元年（一三二一）三月

三二、惣判官代　紀

進美寺文書

二三　但馬国判並在庁官人等連署證

判

元享元年（一三二一）三月

三三、目　代

進美寺文書

二三　但馬国判並在庁官人等連署證

判

元享元年（一三二一）三月

三四、大　介

進美寺文書

二三　但馬国判並在庁官人等連署證

判

元享元年（一三二一）三月

三五、中原国盛

徳禅寺文書

七一　中原國盛寄進状

元弘三年（一三三三）七月十四日

三六、坊門清忠

南禅寺文書

九六　伊達宗助後家尼明照安堵申状

并但馬国外題安堵國宣

元弘三年（一三三三）八月

三七、左衛門権佐
仁和寺文書
六八　後醍醐天皇綸旨
建武元年（一三三四）十月十七日

三八、某
南禅寺文書
九九　伊達義綱軍忠状
建武三年（一三三六）八月　日

三九、兵部大輔（桃井盛義）
南禅寺文書
①一〇〇　兵部大輔盛義書下
建武四年（一三三七）七月八日
②付一〇一　伊達義綱軍忠状
建武四年七月　日
③付一〇二　伊達道西貞綱軍忠状
建武四年七月　日

四〇、左兵衛督（柳原資明）
国分寺文書
一一〇　光厳上皇院宣
建武五年（一三三八）六月三日

四一、沙弥生蓮
大岡寺文書
三二　沙弥生蓮書状
建武五年（一三三八）三月十四日

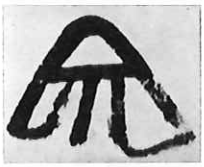
四二、修理権大夫（吉良定家）
南禅寺文書
一〇五　但馬守護吉良貞家吹挙状
暦応元年（一三三八）十一月十五日

四三、左衛門尉（今川頼貞）

進美寺文書
①二五　足利尊氏御判御教書案幷守護代今川頼貞遵守状
暦応二年（一三三九）三月十八日

南禅寺文書
②九八　伊達宗助後家尼明照安堵申状
建武三年（一三三六）五月廿五日

南禅寺文書
③一〇七　伊達朝綱軍忠状
観応二年（一三五一）九月三十日



垣谷文書
④七八　今川頼貞書状
延文元年（一三五六）十二月廿日
⑤七九　今川頼貞書状
延文元年（一三五六）十月十八日

四四、沙弥宗清

大岡寺文書
三三　沙弥宗清譲状
康永二年（一三四三）癸未十二月二日

四五、沙弥円空

大岡寺文書
①三四　沙弥円空寄進田畠坪付注文
貞和二年（一三四六）三月七日
②四〇　沙弥寂心・円空寄進田畠坪付注文
延文元年（一三五六）二月九日

四六、沙弥観智

大岡寺文書
三五　沙弥観智田地寄進状
貞和三年（一三四七）四月八日

四七、某

大岡寺文書

三七　山城守光氏田地寄進状

観応二年（一三五一）正月十一日

四八、山城守光氏

大岡寺文書

三六　冷泉光氏田地寄進状

観応二年（一三五一）正月十一日

四九、足利尊氏

垣谷文書

①七七　足利尊氏御内書

観応三年（一三五二）六月廿日

②七六　足利尊氏袖判下文

観応三年（一三五二）六月八日

五〇、小野範貞

大岡寺文書

三八　小野範貞田地寄進状

正平八年（一三五三）癸巳二月十六日

五一、相知阿闍梨憲承

大岡寺文書

三九　藤原彦鶴女油畠寄進状

正平九年（一三五四）閏十月十九日

五二、藤原彦鶴女

大岡寺文書

三九　藤原彦鶴女油畠寄進状

正平九年（一三五四）閏十月十九日

五三、沙弥寂心

大岡寺文書

四〇　沙弥寂心　円空寄進田畠坪付注文

延文元年（一三五六）二月九日

五四、某

大岡寺文書

四一　某畠地寄進状

延文五年（一三六〇）六月八日

五五、伊達道西

南禅寺文書

一〇九　伊達道西（貞綱）譲状

貞治元年（一三六二）十一月十五日

五六、荏原左衛門大夫範連

大岡寺文書

①四二　荏原範連田地寄進状

正平十八年（一三六三）八月廿一日

②付四三　荏原範連寄進状案

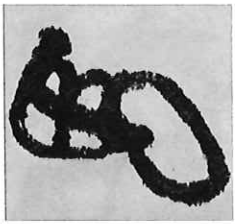
正平十八年（一三六三）八月廿一日

五七、右京亮眞員

大岡寺文書

四四　右京亮眞員寄進状

貞治三年（一三六四）歳次甲辰正月八日



五八、相知土佐守眞親

大岡寺文書

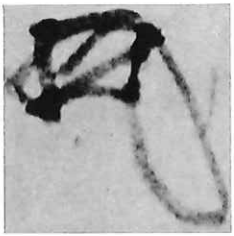
四四　右京亮眞員寄進状

貞治三年（一三六四）歳次甲辰正月八日

五九、沙弥（山名時義）
垣谷文書
八〇　室町幕府奉行人奉書
応安七年（一三七四）十二月廿一日

六〇、足利義満
古志文書
一二八　足利義満御判御教書
明徳二年（一三九一）十二月廿六日

六一、沙弥官内少輔（山名時凞）
大岡寺文書
①四五　但馬守護山名時凞安堵状
応永三年（一三九六）六月十七日
②四六　大岡寺寺領注進状
応永三年（一三九六）六月十七日
垣谷文書
③付八一　山名時凞書下案
応永九年（一四〇二）八月　日



六二、明　真
垣谷文書
八三　田地売却坪付注文
応永十年（一四〇三）十二月十三日

六三、宗□（祥）
大岡寺文書
四八　八代宗祥田地寄進状
文安四年（一四四七）八月八日

六四、山名持豊
曇華院文書
一一三　但馬守護山名持豊遵行状寫
寛正三年（一四六二）十二月廿七日

六五、足利義政

曇華院文書

一一　将軍足利義政御判御教書寫

寛正三年（一四六二）七月廿二日

六六、右京大夫（細川勝元）

曇華院文書

一一三　管領細川勝元施行状寫

寛正三年（一四六二）十二月十一日

六七、長原修理亮遠連

日光院文書

一一四　長原遠連寄進状

文明十四年（一四八二）六月十一日

六八、山名政豊

古志文書

①一二九　山名政豊感状

文明十九年（一四八七）五月十九日

垣谷文書

②付八七　山名政豊判物案

明応四年（一四九五）十一月

六九、寺谷宗右衛門尉實通

大岡寺文書

四九　寺谷實通田地売券

文明十七年（一四八五）乙巳十一月廿日

七〇、太田彦次郎宗正

大岡寺文書

五〇　太田宗正田地寄進状

長享二年（一四八八）戊申拾月二日

七一、垣屋孫右衛門尉遠忠

日光院文書

①一一五　垣屋遠忠寄進田数坪付注文

明応二年（一四九三）二月七日

②一一六　垣屋遠忠寄進状

明応九年（一五〇〇）六月廿日

七二、藤原道眞

大岡寺文書

五一　藤原道眞田地寄進状

明応三年（一四九四）甲寅八月八日

七三、僧長源

大岡寺文書

五五　僧長源寄進状

□□□子六月一日（不詳）

七四、垣屋右衛門尉豊知

日光院文書

①一一七　垣屋豊知寄進状

永正六年（一五〇九）九月十二日

②一一八　垣屋豊知寄進状

永正六年（一五〇九）九月十二日

七五、山名致豊

垣谷文書

八六　山名致豊判物

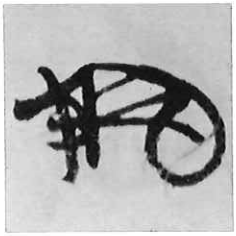
永正十三年（一五一六）五月十三日

七六、河越治久

日光院文書

一一九　河越治久寄進状

永正十三年（一五一六）十月八日



七七、田邊大和守重

日光院文書

一二二　田辺大和守寄進状

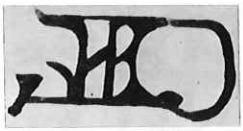
永正十六年（一五一九）己卯三月九日

七八、斉藤右京進成辰

日光院文書

一二二　斉藤右京進成辰安堵状

永正十六年（一五一九）七月廿七日



七九、陶晴賢

垣谷文書

九〇　陶晴賢書状

不詳九月廿六日

八〇、田結庄右京亮能

日光院文書

一二三　田結庄右京亮寄進状

天文三甲午年（一五三四）五月十二日

八一、大野続康

河本文書

一二六　大野續康感状

永祿二年（一五五九）九月三日

八二、伊藤続職

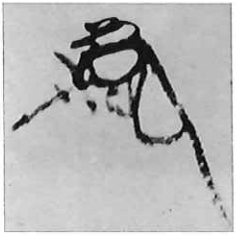
河本文書

一二五　伊藤續職感状

永祿二年（一五五九）八月二十六日

八三、垣屋光成

河本文書
①一二七　垣屋光成判物
永祿三年（一五六〇）十一月廿四日
隆国寺文書
②付一三九　悅岩字號
天正四年（一五七六）小春吉辰



八四、夜久監物亮忠次

垣谷文書
八五　夜久忠次田地賣券
永祿十二年（一五六九）巳歲三月十四日

八五、駿河守元春（吉川元春）

土肥文書
一三三　吉川元春判物
天正三年（一五七五）卯月廿日

八六、右馬頭輝元（毛利輝元）

土肥文書
一三二　毛利輝元判物
天正三年（一五七五）卯月十五日

八七、垣屋駿河守豊續

田結庄文書
一三一　垣屋豊續感状
天正八年（一五八〇）六月十三日

八八、山名氏政

古志文書
一三〇　山名氏政感状
天正八年（一五八〇）五月十九日

八九、羽柴秀長（小一郎）

森垣文書

①一四〇　羽柴秀長鮎漁免状

天正八年（一五八〇）五月十五日

加藤文書

②一四一　羽柴秀長鮎漁免状

天正八年（一五八〇）六月廿五日

九〇、寺本久内

田中文書

一四二　寺本久内判物

天正九年（一五八一）十月十一日

九一、前野長泰

田尻文書

①一四三　前野長康判物

天正十五年（一五八七）十一月廿九日

田口文書

②一四四　前野長泰判物

文祿四年（一五九五）正月廿七日

九二、小出吉政

田口文書

一四五　小出吉政判物

文祿四年（一五九五）八月十二日

九三、小出修理吉重亮

田口文書

一四六　小出修理亮判物

寛文七年（一六六七）未十一月廿六日

九四、仙石政辰

熊田文書

一四七　宵田村市場制札

元文四巳未年（一七三九）九月十五日

六、古文書編年目録

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
1	七三七	天平九年	正税帳	正倉院文書	一七二
2	七四〇	天平十二年	某國符案斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六四
3	七四〇	天平十二年	但馬國移斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六五
4	七四〇	天平十二年	帳簿斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六六
5	七四〇	天平十二年	丹後國下達文書案斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六七
6	七四〇	天平十二年	某國符案斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六八
7	七四〇	天平十二年	但馬國文書斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一六九
8	七四〇	天平十二年	但馬國文書斷簡	正倉院文書 鳥兜下貼文	一七〇
9	七五〇	天平勝宝二年	但馬國司解（正月八日）	東南院文書	一五七
10	七五〇	天平勝宝二年	但馬國司牒（三月六日）	東南院文書	一五八
11	七五〇	天平勝宝二年	但馬國司牒（五月九日）	東南院文書	一五九

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
12	七五〇	天平勝宝二年	東大寺三綱返抄案（五月十三日）	東南院文書	一六〇
13	七五〇	天平勝宝二年	但馬國司牒（六月廿六日）	東南院文書	一六一
14	七五〇	天平勝宝二年	東大寺三綱牒案（七月二日）	東南院文書	一六二
15	七五七	天平勝宝九年	解文斷簡	正倉院文書	一六三
16	一一六一	永暦二年	大岡寺敷地山林注進状案	鳥兜下貼文	
17	一一九四	建久五年	小野時廣奉書案	大岡寺文書	二六
18	一一九四	建久五年	小野時廣奉書案	進美寺文書	一
19	一一九八	建久九年	五輪宝塔三百基造立供養願文案（巻頭カラー）	進美寺文書	二
20	一一九八	建久九年	但馬國司庁宣	仁和寺文書	三
21	一一九九	正治元年	源親長巻數請取状案	進美寺文書	六二
22	一二〇八	承元二年	將軍源實朝家政所下文寫	法恩寺年譜	四
23	一二二一	承久三年	關東下知状	伊達文書	五六
24	一二二二	貞応元年	關東下知状	仁和寺文書	九一
25	一二二三	貞応二年	關東下知状	仁和寺文書	六三
26	一二二三	貞応二年	守護法橋昌明寄進状案	進美寺文書	六四
27	一二二八	安貞二年	守護法橋昌明請文案	進美寺文書	五
					六

28	一二二九	寛喜元年	關東御教書案	進美寺文書	七
29	一二三二	貞永元年	四条天皇綸旨	仁和寺文書	六五
30	一二三八	嘉禎四年	仁和寺門跡御教書	仁和寺文書	六六
31	一二四七	宝治元年	越生有高譲状寫	法恩寺年譜	五七
32	一二四七	宝治元年	将軍藤原頼嗣家下文寫	法恩寺年譜	五八
33	一二五〇	建長二年	但馬國留守所下文	進美寺文書	八
34	一二五一	建長三年	關東下知状案	進美寺文書	九
35	一二六八	文永五年	安居院公澄書状案	進美寺文書	一〇
36	一二六八	文永五年	國司庁宣案	進美寺文書	一一
37	一二六八	文永五年	天臺座主宮尊助令旨案	進美寺文書	一二
38	一二七〇	文永七年	後嵯峨上皇院宣案	進美寺文書	一三
39	一二七六	建治二年	關東下知状寫	法恩寺年譜	五九
40	一二七七	建治三年	亀山上皇院宣案	進美寺文書	一四
41	一二七九	弘安二年	關東下知状	伊達文書	九二
42	一二七九	弘安二年	亀山上皇院宣案	進美寺文書	一五
43	一二八〇	弘安三年	聖某宛行状	進美寺文書	一六
44	一二八二	弘安五年	越生長經譲状寫	法恩寺年譜	六〇

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
45	一二八二	弘安五年	官宣旨案	進美寺文書	一七
46	一二八五	弘安八年	但馬國太田文	宮内庁書陵部外	一七一
47	一二八九	正応二年	天臺座主無品親王庁下文（断簡）	進美寺文書	一八
48	一二九〇	正応三年	源定宗田地寄進状	大岡寺文書	二七
49	一二九〇	正応三年	關東御教書案	法恩寺年譜	一九
50	一二九〇	正応三年	守護施行状案	進美寺文書	二〇
51	一二九四	永仁二年	法眼覺乗奉書	仁和寺文書	六七
52	一二九七	永仁五年	關東下知状寫	法恩寺年譜	六一
53	一二九九	正安元年	延暦寺根本中堂後戸寺領補任状	進美寺文書	二一
54	一三〇〇	正安二年	橘氏女田地寄進状	大岡寺文書	二八
55	一三〇〇	正安二年	源忠員・尼妙眞寄進状	高山寺文書	七五
56	（一三〇一）	□（正）安三年	氏名未詳寄進状	大岡寺文書	五四
57	一三〇七	徳治二年	僧實俊仏供田施入状	大岡寺文書	二九
58	不詳		僧長源寄進状	大岡寺文書	五五
59	一三一一	応長元年	橘覺阿等連署田地寄進状	大岡寺文書	三〇
60	一三一六	正和五年	八代荘安養院領田寄進状	徳禅寺文書	六九

61	一三二一	元享元年	伊達宗綱譲状幷關東外題安堵状	南禅寺文書	九三
62	一三二一	元享元年	進美寺住僧等解状（巻頭写真図版）	進美寺文書	二二
63	一三二一	元享元年	但馬國判並在庁官人等連署證判	進美寺文書	二三
64	一三二一	元享元年	在庁官人日下部某添状	進美寺文書	二四
65	一三二一	元享元年	八代荘安養院領田寄進状	德禅寺文書	七〇
66	一三二三	元享三年	橘覺阿等連署畠地寄進状案	大岡寺文書	三一
67	一三三三	元弘三年	中原國盛寄進状	德禅寺文書	七一
68	一三三三	元弘三年	伊達道西（貞綱）安堵申状幷上野国外題安堵國宣	伊達文書	九四
69	一三三三	元弘三年	伊達道西（貞綱）軍忠状	伊達文書	九五
70	一三三三	元弘三年	伊達宗助後家尼明照安堵申状幷但馬国外題安堵國宣	南禅寺文書	九六
71	一三三四	建武元年	後醍醐天皇綸旨	仁和寺文書	六八
72	一三三五	建武二年	八代治眞書状寫	德禅寺文書	七二
73	一三三五	建武二年	八代宗眞寄進状寫	德禅寺文書	七三
74	一三三五	建武二年	但馬八代荘安養寺田下地所當注文	德禅寺文書	七四
75	一三三六	建武三年	伊達道西（貞綱）安堵申状	南禅寺文書	九七
76	一三三六	建武三年	伊達宗助後家尼明照安堵申状	南禅寺文書	九八
77	一三三六	建武三年	伊達義綱軍忠状	南禅寺文書	九九

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
78	一三三七	建武四年	兵部大輔盛義書下	南禅寺文書	一〇〇
79	一三三七	建武四年	伊達義綱軍忠状	南禅寺文書	一〇一
80	一三三七	建武四年	伊達道西貞綱軍忠状	南禅寺文書	一〇二
81	一三三八	建武五年	桃井盛義披露状	伊達文書	一〇三
82	一三三八	建武五年	桃井盛義書下	伊達文書	一〇四
83	一三三八	建武五年	光厳上皇院宣（巻頭カラー）	国分寺文書	一一〇
84	一三三八	建武五年	沙弥生蓮書下	大岡寺文書	三二
85	一三三八	暦応元年	但馬守護吉良貞家吹擧状	南禅寺文書	一〇五
86	一三三九	暦応二年	足利尊氏御判御教書幷守護代今川頼貞遵行状	進美寺文書	二五
87	一三四一	暦応四年	立石五郎入道法阿申状案	南禅寺文書	一〇六
88	一三四三	康永二年	沙弥宗清譲状	大岡寺文書	三三
89	一三四六	貞和二年	沙弥円空寄進田畠坪付注文	大岡寺文書	三四
90	一三四七	貞和三年	沙弥観智田地寄進状	大岡寺文書	三五
91	一三五一	観応二年	冷泉光氏田地寄進状	大岡寺文書	三六
92	一三五一	観応二年	山城守光氏田地寄進状	大岡寺文書	三七
93	一三五一	観応二年	伊達朝綱軍忠状	南禅寺文書	一〇七

94	一三五二	観応三年	足利尊氏袖判下文	垣谷文書	七六
95	一三五二	観応三年	足利尊氏御内書	垣谷文書	七七
96	一三五三	正平八年（文和二年）	小野範貞田地寄進状	大岡寺文書	三八
97	一三五四	正平九年（文和三年）	藤原彦鶴女油畠寄進状	大岡寺文書	三九
98	一三五六	延文元年	沙弥寂心、圓空寄進田畠坪付注文	大岡寺文書	四〇
99	一三五六	延文元年	伊達眞信軍忠状	伊達文書	一〇八
100	一三五六	延文元年	今川頼貞書状	垣谷文書	七八
101	一三五六	延文元年	今川頼貞書状	垣谷文書	七九
102	一三六〇	延文五年	某畠地寄進状	大岡寺文書	四一
103	一三六二	貞治元年	伊達道西（貞綱）譲状	南禅寺文書	一〇九
104	一三六三	正平十八年（貞治二年）	荏原範連田地寄進状	大岡寺文書	四二
105	一三六三	正平十八年	荏原範連寄進状案	大岡寺文書	四三
106	一三六四	貞治三年	右京亮眞員寄進状	大岡寺文書	四四
107	一三七四	応安七年	室町幕府奉行人奉書	垣谷文書	八〇
108	一三九一	明徳二年	足利義満御判御教書	古志文書	一二八
109	一三九五	応永二年	念阿知行分上のかや南方田畠坪付注文案	垣谷文書	八二

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
110	一三九六	応永三年	但馬守護山名時凞安堵状	大岡寺文書	四五
111	一三九六	応永三年	大岡寺寺領注進状	大岡寺文書	四六
112	一四〇二	応永九年	山名時凞書下案	垣谷文書	八一
113	一四〇三	応永十年	田地賣却坪付注文	垣谷文書	八三
114	一四一八	応永二十五年	守護代垣屋凞續安堵状案	大岡寺文書	四七
115	一四四一	嘉吉元年	安田續貞譲状案	垣谷文書	八四
116	一四四二	嘉吉二年	垣屋續成書状案	垣谷文書	八九
117	一四四七	文安四年	八代宗祥田地寄進状	大岡寺文書	四八
118	一四六二	寛正三年	將軍足利義政御判御教書寫	曇華院文書	一一一
119	一四六二	寛正三年	管領細川勝元施行状寫	曇華院文書	一一二
120	一四六二	寛正三年	但馬守護山名持豊遵行状寫	曇華院文書	一一三
121	一四八二	文明十四年	長原遠連寄進状	日光院文書	一一四
122	一四八五	文明十七年	寺谷実通田地賣券	大岡寺文書	四九
123	一四八七	文明十九年	山名政豊感状	古志文書	一二九
124	一四八八	長享二年	太田宗正田地寄進状	大岡寺文書	五〇
125	一四九三	明応二年	垣屋遠忠寄進田数坪付注文	日光院文書	一一五

126	一四九四	明応三年	藤原道眞田地寄進状	大岡寺文書 五一
127	一四九五	明応四年	山名政豊判物案	垣谷文書 八七
128	一四九五	明応四年	段銭切符請取置文	垣谷文書 八八
129	一五〇〇	明応九年	垣屋遠忠寄進状	日光院文書 一一六
130	一五〇一	明応十年	山名致豊安堵状寫	大岡寺文書 五二
131	一五〇八	永正五年	大岡寺寺領散在田畠注進状	大岡寺文書 五三
132	一五〇九	永正六年	垣屋豊知寄進状	日光院文書 一一七
133	一五〇九	永正六年	垣屋豊知寄進状	日光院文書 一一八
134	一五一六	永正十三年	河越治久寄進状	日光院文書 一一九
135	一五一六	永正十三年	山名致豊判物	垣谷文書 八六
136	一五一八	永正十五年	垣屋豊知寄進状	日光院文書 一二〇
137	一五一九	永正十六年	斉藤右京進成辰徳久名段銭安堵状	日光院文書 一二一
138	一五一九	永正十六年	田邊大和守寄進状	日光院文書 一二二
139	不詳	同上	陶晴賢書状	垣谷文書 九〇
140	一五三三	天文二年	田原直綱寄進状	日光院文書 一二四
141	一五三四	天文三年	田結庄右京亮寄進状	日光院文書 一二三
142	一五五九	永祿二年	伊藤續職感状	河本文書 一二五

番号	西暦	年号	文書題目	文書名	文書番号
143	一五五九	永禄二年	大野續康感状	河本文書	一二六
144	一五六〇	永禄三年	垣屋光成判物	河本文書	一二七
145	一五六九	永禄十二年	夜久忠次田地賣券	垣谷文書	八五
146	一五七〇	元亀元年	山名時凞等宛織田信長書状案	今井宗久書札留	一三五
147	一五七〇	元亀元年	太田垣輝延等宛織田信長書状案	今井宗久書札留	一三六
148	一五七五	天正三年	毛利輝元判物	土肥文書	一三二
149	一五七五	天正三年	吉川元春判物	土肥文書	一三三
150	一五七五	天正三年	八木豊信書状	吉川家文書	一三四
151	一五七六	天正四年	悦岩字號	隆國寺文書	一三九
152	一五七八	天正六年	但馬山名氏政宛織田信長朱印状	吉田文書	一三七
153	一五七八	天正六年	山名豊國宛羽柴秀吉条書寫	記録御用所本	一三八
154	一五八〇	天正八年	山名氏政書状	古志文書	一三〇
155	一五八〇	天正八年	垣屋豊續感状	田結庄文書	一三一
156	一五八〇	天正八年	羽柴秀長鮎漁免状	森垣文書	一四〇
157	一五八〇	天正八年	羽柴秀長鮎漁免状	加藤文書	一四一
158	一五八一	天正九年	寺本久内判物	田中文書	一四二

159	一五八七	天正十五年	前野長泰判物	田尻文書	一四三
160	一五九五	文禄四年	前野長泰判物	田口文書	一四四
161	一五九五	文禄四年	小出吉政判物	田口文書	一四五
162	一六〇一	慶長六年	江戸幕府勘定方奉行連署状写	記録御用所本	一五一
163	一六〇一	慶長六年	徳川家康領知目録写	記録御用所本	一五二
164	一六一四	慶長十九年	山名主殿（矩豊）覚書	記録御用所本	一五〇
165	一六二五	寛永二年	徳川家光朱印状写及び覚書写	記録御用所本	一五四
166	一六二五	寛永二年	徳川家光朱印状写	記録御用所本	一五五
167	一六三一	寛永八年	江戸幕府老中連奉書写	記録御用所本	一五六
168	一六六七	寛文七年	小出修理亮判物	田口文書	一四六
169	一七一〇	宝永七年	宵田村市場口上書	河本（喜）文書	一四八
170	一七三九	元文四年	宵田村市場制札	熊田文書	一四七
171	一八三四	天保五年	宵田村市場口上覚	河本（喜）文書	一四九